

# Fate/joker ~運命の切り札~

タナト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

—世界には二つの戦いがあつた—

バトルファイト、それはそれぞれの種の始祖たる53体の  
—不死生命体「アンデッド」—による種の繁栄と万能の力を賭けた  
バトルロワイアル。

聖杯戦争、それは7人の魔術師が願望機たる聖杯をかけ、それぞれ  
のクラスの

—英靈「サーヴァント」—を使役し戦う儀式。

今、交わるはずのない二つの運命が出会い。それがもたらすのは救  
いか、罰か：

心に剣を、輝く勇気を…

「運命（f a t e）」の「切り札（ジョーカー）」をつかみ取れ！

この小説はpixivにも投稿しています。

目

次

序章 永遠の切り札

第1話 始まりの夜に

第2話 青い騎士

第3話 二つの戦い

第4話 聖杯、再び

37 22 13 4 1

## 序章 永遠の切り札

2005年 冬 世界は滅亡の危機に陥っていた。

黒い異形、ダークローチと呼ばれる謎の怪物が日本列島を蹂躪していた。

個々のとしてはそこまでの脅威ではなかつたが、それらは文字どおり無尽蔵の数で破壊の波を広げていたのだ。

そしてその波はこの冬木町にも届いていた。

その町の豪邸に住む、虚ろな目をした少女、桜は呆然とテレビを見ていた。家の者が避難を促し騒いでいる。しかしその声は桜には届かない。それだけテレビの映像は彼女にとつて興味深いものだつた。

黒い化け物は、人も建物も動物も何もかも平等に破壊していた。そこに桜は惹かれていたのかもしれない。

やがてその桜も家の者に手を引かれ、避難所に向かつた。通りに出るとそこは避難している人でごつた返していた。車は渋滞でだめだといわれ徒步で避難するしかなかつた。少女は外で迫りくる無数の黒い異形を見た。後ろから確実に迫つていた。

「…………っ!!」

桜は転び、使用人も手を放してしまった。しかし、人の波にのまれどんどん距離が開いていく。周りにはすでに襲われている人もいる。

「あ、ああ…」

黒い怪物が迫る、しかし桜は恐怖を感じていなかつた。

（そうか、これはいつもと同じなんだ…）

そう、いつもと同じように、これまでのようく、無数の蟲たちに蹂躪されていくだけなのだ。抗つて何になるのか。抗えない定めなのだから。

桜はそう思いもう動かなかつた。

しかし、運命は切り札によつて変わつた。

化け物の毒牙が少女に達しそうになる時…

「その子に手を出すな！」

力強い声が耳に届くのだった。

怪物との間に入つたのは、鎧に身を包んだ黒い異形だった。

「ハアアーッ!!」

異形は、叫びその手に持つ弓のような形をした刃をふるつた。切り裂かれると化け物は一瞬で塵になつた。

「逃げろ…ウツ、グ…」

緑の化け物は桜に背を向けたまま距離を取り言つた。しきりに頭を押さえていた。しかし、すでに生きる意志を失つた桜は動かない。

「早く行け…俺が、俺でいられるうちに…」

それでも動かない桜。

（どうして私を助けるの？）

彼が何者なのかは知らないが赤の他人であるはずだ。なのに何故？

それに化け物の波が迫つていて、一人で食い止めようとしているなら無謀にもほどがある。

「すまない。だが…どうか生きてくれ」

異形は静かに言つた。

桜には分からなかつた。

「どうか、笑つてくれ」

その胸に湧き出た熱の意味が。

迫りくる怪物の群れに異形は何も言わず静かに刃を構え、

「走れ！振り向くな！」

と怒鳴つた。

「…！」

その声に恐怖を感じたのか、胸に沸いた奇妙な熱のせいなのかはわからない。だが今度は足が動いた。桜は走つた。生きるために。

途中振り返ろうとしたが後ろからくる風のせいで振り向けなかつた。

ただ一つはわかるのは怪物が追つてこないということだけである。

とある林の中、2人の青年が立つていた。

「俺は運命と戦う。そして、勝つて見せるー

「それが、お前の答えか…」

「俺たちはもう、交わることもない、触れ合うこともない。それで

いいんだー

「…っ！剣崎ー

「始、お前は人間たちの中で生き続けろ！ー

ここに一つの運命が終結した。

# 第1話 始まりの夜に

3年後 2008年 冬木市

俺、相川始は、夕暮れの中あまり整備のされていない区画を歩いていた。

「ここだよ、ここ」

俺はそんな虎太郎の言葉に足を止めて虎太郎の見て いる方向を見る。するとそこには何の変哲もない空き地があつた。

「ここ」が14年前の大火災で燃えてしまつた。剣崎君の家のあつた場所だよ」

言葉なんて出るわけもない、こんなところに来たところで何になるわけでもない、あいつを救えるわけもない。なのに、なんだ?この気持ちは…この胸の苦しさは…

「…………

俺は、無意識に歯を食いしばつていた。

火事が起こつていなければ、あいつはあの嵐に飛び込んでいくことはなかつたのではないか、家族というぬくもりの中にあれたなら、悲しい喪失と後悔がなかつたならあいつは苦しみを背負うこともなかつたのか…いや、違うな。あいつの最大の不幸は、この俺に出会ってしまったことだ。

「始、どうする?もう少しここにいるかい?」

俺を見かねて虎太郎が声をかけてきた。

「いや、いい。早く行こう」

俺はすぐに答えた。本当にここにいても何も変えられない。むしろ胸を締め付けるばかりだつた。

そして俺たちは泊まる予定のホテルに向かつて歩き始めた。もともとこんなところまで来たのは虎太郎の取材のためだ。とりあえず仮面ライダーの本で成功した虎太郎は、あれからも怪人関係の都市伝説を追つていた。魔化魍だのイマジンだの俺や橋が戦うこともあつた。正直迷惑だ。今回もこの街に不可解な事件が起こつて いるらしいのことだ。14年前剣崎の巻き込まれた大火災とも関係してい

るらしい。そして本のために写真を撮らされる。こいつ専属のカメラマンになつたみたいで不本意だ。取りたい写真は他にあるのに：剣崎の故郷だと言うから付いて来たが、やはり何になるわけでもなかつた。ただ：

「なあ、もしその大火災が起らなくて剣崎が家族と暮らしていたとしたら、あいつはライダーにならなかつたと思うか？」

そんな言葉が自然に口から出ていた。

「……さあ、どうだろ。剣崎君が戦っていたのは両親に何もできなかつた後悔からだ。でもそうでなくとも剣崎君なら戦つてしまふような気もするよ。彼は誰よりも人間を愛していただからね」

虎太郎は俺の唐突な質問に驚きながらも答えてくれた。

「そうだな」

そうだ、あいつはそういうやつだ。

俺は心が少し軽くなり、同時に重くもなつた。

そしてふとあの子はこのあたりに住んでいたなと思いだした。

※

私、間桐桜は食材の買い出しに出かけていた。

あの事件から3年が過ぎた。あの事件は、おじいさまや魔術協会でも原因が分からなかつたらしい。ただその1年後、仮面ライダーについての本が発売され大騒ぎになつた。その本には事件と事件の前に多発していた怪人騒ぎの真相とともに仮面ライダーの戦いについて事細かに記されていた。仮面ライダーが戦うのは不死身の生命体アンデットそれにおじいさまは強く興味を持たれた。なにしろおじいさまが追い求める不老不死の生命体だ。興味を待たないはずはない。しかし本は売れ、再建されたBOARDは、とても有名になつた。魔術師たちは、知名度がありすぎて手を出せないらしい。

私を2年前救つたのは、仮面ライダーだつたのだろう。だから、私もその本を読んで今でも繰り返し読んでいる。読み入つてしまつた。仮面ライダー達、それぞれの葛藤を抱えながら戦つていたその姿に勇気づけられたからだ。そして知つた。私を救つたのは、ハートストークのライダー、仮面ライダーカリス。何故か彼の経歴だけは特に記述が

ない。

だけどころか書かれていた。——彼は、拒絶されてしまうかもしれないという恐怖から愛する人に仮面ライダーであることを告げられず、またそのせいでその人たちを危険にさらしてしまった苦悩にさいなまれながら戦っていた。だが仮面ライダーブレイド、剣崎一真との対立と共闘を通して、彼は人を守ることに自信と誇りを得ていった。そして、ただ愛する人を守るため戦っていた姿はまさにハートのライダー、愛の戦士といえるだろう——と。

ただ、本を読むだけだつたなら、なんとも思わなかつただろう。ただその戦士は確かに現れ、私を救つた。その後ろ姿は今でも目見焼き付いている。告げられない境遇、それゆえの苦悩、私には痛いほど分かつた。その戦士に強い親近感を覚える。どんな人なんだろう？ 会つてお礼が言いたい。本には名前すら載つていなかつた。それは、その身近な人には話せていないのだと考えれば自然だ。だがなぜだろう、戦いは終わつたのに、なぜ告げないんだろう。

彼に救われた時から、私は少しづつ変われた。やはりおじいさまは怖いけれど、私を助けてくれる人もいるんだと思えたから、あの人はただ純粹に笑つっていてほしいと言つていたから。そして今の私には楽しみがある、一つはバイトに行くこと、そしてもう一つはとある写真家の写真集を見ることだ。

私がバイトに行つているのは、冬木から少し離れたところにある喫茶店。少し遠いけど週に一度必ず行つている。どうしてかというと彼、相川始さんがいるからだ。初めは弓道部の付き合いで、その喫茶店に行つたのだが、その時店番をしていたのが始さんだつた。

当時まだ暗かつた私だが、妙に彼の雰囲気が気になつた。彼は優しかつたが、どこか影があつた。何かを隠しているようで何かを探しているような。そしてどことなく私に似ている気がした。気づいたらまた彼に会いたくなつていた。もしかしたら一目惚れというやつかもしれない。そしてたまたまあつたバイト募集に自分でもなぜそんなことができたのか分からぬが、すぐ応募した。

その始さんの名前を知つた。彼はとある縁で5年ほど前からこの

店に下宿しているらしい。そして店を手伝いながらこの店のなくなつたご主人と同じカメラマンをやつてゐるそうだ。そう、2つ目の写真家とは彼のことだ。彼は真崎剣一という名前で本を出ししている。彼がとる写真はどこかはかなげで純粹な写真だ。私は一目で気に入り、新しい写真集が出た時は必ず買つてゐる。それは私の宝物で、シミでもつけようなら兄さんだつて許さない。

そして、喫茶店ハカランドで働き始めた私、そこではすべてがひどく新鮮だつた。家事もろくにできない私は、喫茶店を経営する、遙香さんにいろいろ教えてもらつた。掃除の基礎から少しづつ接客も覚え、料理も日々教えてもらうようになつてゐる。なぜそんなに良くしてもらえるのか彼女に尋ねたけど、前にも同じようなことがあつたから、と微笑むだけだつた。

私は今、充実してゐる。始さんも遙香さんも本当によくしてくれる。家の中は地獄でも安らげる場所がある。しかし……

「はあ……」

私は大きなため息をつく、大きな不安があつた。

聖杯戦争、ちょうどアンデッドのバトルファイトによく似た戦い。私は兄さんのおかげで戦わずに済むけれど、今まで通りの生活が出来だらうか？ それがとても心配だ。

始さんに会えなくなることだけは嫌だ…始さん、今何をしていますか？

※

ホテルへのチェックインを終えた俺たちは、もう少し街を回つてみることにした。もう夜なので俺としては、あの夜景や大きな橋の写真でも撮りたいものだ。

「不可解な事件は決まつて夜に起ころるらしいよ」

道を歩きながら虎太郎が唐突に話しかけてきた。

「……」

正直興味がなかつた。

こんな静かな住宅街でそんな物騒なことそうそう起ころんだろう

⋮

——キイン、キ…ンガキツ——

常人を越えた聴力を持つ俺の耳に不可解な音が入ってきた。

これは、剣戟の音…!?

念のためだ、確かめてみるか…：

「お前はここでじつとしている。いいな」

俺は虎太郎に忠告して駆け出した。

「え、おい！始？」

困惑する虎太郎をおいて俺は音のする方へ走った。

音は校舎のような建物から出ているようだ。しばらく走るとグラウンドが見えた。

「……!?」

そこでは赤い男と青い男が戦っていた。

赤い男は双剣を、青い男は槍を使っている。お互い火花を散らし、激しく戦っていた。

その奥には高校生くらいの女がいた。見たところ赤い男の味方のようだが…：

あれは人間の動きなのか？

とても人間とは思えない、怪人か!?

俺は物陰で息を潜め、様子を見ていた。しかし…：

「始…！…どうしたんだよ…？」

虎太郎がよろよろと走ってきた。

あのバカ…：

「誰だつ!?」

案の定気づかれたようだ。

「え…え…！」

ようやく虎太郎も状況に気づく。

青い方が明らかに敵意をもつて虎太郎に向かつて走ってきた。

「おい！虎太郎逃げろ！逃げて櫛を呼べ！」

俺の声に虎太郎は元来た方へ走り出した。

俺は物影を出て、グラウンドのフェンスを一気に乗り越え、青い方の前に立ち塞がつた。

青い奴は紅い槍を構え、立ち止まつた。

「へへ、もう一人いたのか見たところマスターつてわけじやなきそ  
うだが：仲間のために凹になるとはいひ度胸だ。気に入つたぜ、お前  
マスターだと？何のことだ：

「お前たちはなんだ？」

俺は相手を睨みながら言つた。

「へえ、この状況で全く動じてねえとは、ますます氣に入つたぜ。だが  
悪いな目撃者は消さなきやならねえ」

「アーチャー、ランサーを止めて！」

少女の声が耳に入つてきたが気にしなかつた。

「……！」

次の瞬間、来る。破壊者の本能でそう感じた俺は、常人なら反応す  
ることすらできない速度で突き出される槍を紙一重で避け、カウン  
ター気味に飛び蹴りを食らわせた。さらにその反動を利用して距離  
を取つた。

躱されたとも反撃が来るとも思われていなかつたのか、攻撃はうま  
く決まつた。しかし、相当の力を込めたはずだが手ごたえはない。  
相手は躱されたことにひどく驚いているようだ。

俺は時間稼ぎのため、引かずに油断なく敵を見つめた。

「ふふふ、はつはつは！いや、すまん。なめすぎていたようだ。力を入  
れてなかつたとはいえ俺の一撃を躱して蹴りを入れるとは……その目、  
戦士の目だな」

相手の目つきが一気に変わつた。ワンテンポ遅れて赤いのが俺と  
奴の間にいる。

「凛、どうするんだ？」

赤い男は肩越しに俺を睨みつつ向こうの少女に指示を仰ぐ。

「……！」

しかし少女は戸惑つてゐるようだつた。

まずい、肌でそう感じた。今手元にカードは『S P I R I T』しか  
ない。『カテゴリー2』では勝てそうにない、だからといつて『ジョー  
カ』の力をさらすのも危険すぎる。せめて『カテゴリーA』があれ

ば…

それにしても赤いのは味方か？敵か？

「嬢ちゃんには悪いがクライアントに初見は本気出すなって言われてな。今は目撃者を消す方が先だ」

再び青いのが槍を構える。

次躲せる保証はない。どうする…？

シユツ！

先ほどとは比べ物にならない速度で紅い槍が迫つてくる。

「そこのあなた、逃げなさいっ！」

そう叫んだ少女は、宝石のようなものを投げた。

ピカツ！

彼女が投げた宝石は、閃光弾のように輝く。  
逃がしてくれるなら素直にそうさせてもらう…：  
俺は閃光に乗じて飛びずさつて全力で逃げた。彼女たちが足止め  
してくれているのか、追つてはこなかつた。

ピピピ

俺は走りながら、虎太郎に電話した。

トゥルルルルルルル

(…あつ、始！だ、大丈夫!!)

「ああ、なんとかな…今お前はどこにいる？」

そのまま、隠れた場所を教えられた俺は、そこに向かつた。しばらく走ると、大きな屋敷の廃墟が見えた。その屋敷の蔵に俺は入り、虎太郎を探した。

「あ、始、ここだよ」

俺は蔵の隅でうずくまる虎太郎に駆け寄る。

「とりあえず、無事なようだな…それにしてもなんだつてこんな場所に隠れた？」

俺はあきれ顔で聞く、こんな場所は隠れるには適さない。  
「え？なんとなく…だけど…」

「まあ、とりあえず場所を変えるぞ」

もつと人波に紛れられそうに逃げなければ。

「う、うん」

「そういうえば橋は？」

「ダイヤのカードとバツクル、それとハートのカード持つてこつちに向かつてるつて…」

橋が来ればなんともなる、それまでどうするか…

「残念だつたな、そう簡単に逃がすわけにはいかねーんだ」

その声にハツと振り向くと青い男が蔵の入り口に立つていた。  
「つたく、嬢ちゃん達まくのに時間喰つて探索のルーン使う羽目になつちまつたぜ」

青い男はじりじり詰め寄つてくる。

「は、始…」

だからこういう閉所は逃走時に隠れるには適さないんだ。見つかつた時に逃げにくくなる…

俺は再び青い男の前に立ちふさがつた。

今『ジョーカー』になれば、確実に虎太郎を巻き込んでしまう…：

「始、君だけでも逃げろ！君一人なら…」

馬鹿を言え、そんなことできるか…仲間を、俺の家族を、見捨てはしない！

やるしかないか。

俺は決死の覚悟で男に飛び掛かつた。

ザシユツ！

男の槍がついに俺の左肩を貫いた。

「ぐああ！」

しかしそれも想定済みだつた。

「何…」

男は驚愕していた。それもそうだ、さらに赤く染まつてゐるはずの槍は鮮やかな緑に染まつていたからだ。

一瞬の動搖、チャンスは今しかない！

俺は槍が貫通するのも気にせず相手に体当たりした。なんとか相手を倒すが…

「こんのお！」

ドツ！

すぐに蹴り飛ばされてしまった。

「グハッ…」

口からも吐血し、緑の血をまき散らしながら俺は、蔵の壁にたたきつけられた。

「ああ、は、始え！」

虎太郎の悲鳴が聞こえる。しかし肩の傷と蹴りのダメージで動けない。

もう手はない。万事休すか…

俺があきらめかけたその時、目の前で蔵の床が光始めた…

「なんだ…！」

青い男も驚いてあとずさる。

右手の甲がなぜかうずいた。

光が収まるときには騎士の姿をした美しい少女が佇んでいた。

少女は真っ直ぐに俺を見つめた。

透き通るような蒼い生地の上に纏つた、月光を受けて輝く白銀の鎧。

それを見て俺が想起するものは一つ。かつて幾度も刃を向け合い、何度も並んで共に戦った気高き騎士、

「ブレ…イド…」

その場の全員が呆然とする中、少女は凛とした声で力強く言つた。

「サーヴァント、セイバー。召喚に応じて参上した」

「問おう、貴方が私の『マスター』か？」

その澄んだ声を聴いて俺は、戦い運命がまた始まるのだと無意識のうちに理解した。

## 第2話 青い騎士

「ブレ…イド…？」

驚くしかない俺を見て、現れた少女はなお凜として言つた。

「サー・ヴァント、セイバー。召喚に応じ参上した。問おう、あなたが私のマスターか」

セイバー？ マスター？ なんなんだ？

俺が状況を飲み込めずにはいると、ズキッ、と右手の甲が痛んだ。見ると血のように赤い紋章が浮かび上がっていた。

これは、俺（ジョーカー）の紋章？

それは、かつてデータで見た、俺（ジョーカー）のラウズカードの絵柄そのものだつた。

なぜこんなものが…と考える余裕もなく、目の前の少女が口を開く。

「これより私の剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した」

セイバーと名乗る少女は一方的にそう告げると、蔵の入り口で呆然としている男に飛び掛かつていった。そして男も外まで飛びずさり、戦いが始まつた。

ガキッ！ ガジヤン！

少女は、男の繰り出す槍を見えない剣のような武器でさばいていた。遠目に見ても分かる、どちらもすさまじい戦闘技術だ。

「は、始！ 大丈夫？」

駆け寄ってきた虎太郎に肩を貸され、俺は立ち上がり蔵の入り口まで歩いた。

「始、あれは…」

「俺にも分からん…」

戦闘は徐々にヒートアップしていく。

「テメエ…！ 卑怯者め！ 自らの武器を隠すとは何事だ！」

「……」

男が怒氣を孕んだ声で叫ぶが、少女は答えない。

バキッ！…バツ！

唐突に男が飛びずさり、少女と距離を取る。

「どうしたランサー。止まつていては槍兵の名が泣こう。そちらが来ないのなら私が行く」

少女は、挑発するように言つた。

「一つ聞く。お前のその武器は何だ？」

ランサーと言われた男はあくまで冷静に返す。

「さあ、剣か槍剣か戦斧か…もしかすると弓かもしれんぞ。ランサー」

少女はとぼけるように答える。

「へつ、ぬかせ…なあ、お互いに初見だ。こゝらで分けといかねーか？」

「断る！あなたはこゝで倒れる。ランサー」

男の誘いを断り、少女は剣を構えなおした。

「そうかよ…こつちの目的は元々様子見だつたんだがな…」

そう言うと、男は槍を深く構えた。

「その心臓もらひ受ける！」

その言葉とともに男の視線が一層鋭くなる。そして紅い槍が鈍く光りだした。

先ほどまでは比べ物にならないほどのエネルギーを感じ、俺も思わず身構える。

「宝具つ…！」

少女も危険性を感じ、身構える。

「受けろ！『刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）』！」

その言葉に反応し、槍の鈍い光は閃光となり、夜の闇を切り裂いた。

少女は身を翻すも、その槍の先端はその白銀の鎧を貫き、中の肉を抉つた。それでも何とか致命傷を避け、少女は飛び退いた。

「…躲したな…わが必殺の一撃を…！」

男は、渾身の一撃を躱され、強烈な怒気を放つ。

「ゲイ・ボルグ…御身はアイルランドの光の御子か！」

少女には男の正体が分かつたようだ。

「…フツ、ドジつたぜ。これを出すからには必殺でなければならぬ」

のに…」

正体を言い当てられたせいなのか、怒氣を解く男。

「チツ、悪いがクライアントから撤退命令が出た。この勝負は預けるぜ」

そう言つたかと思うと男は近くの屋根まで飛び、姿を消した。

「クツ、逃げたか…」

その後も少女は警戒を解かず、屋敷の外を見つめる。

「お前はいつたい…？」

俺は、貫かれた肩を庇いながら虎太郎の前へ出て問う。少女はすぐに視線を向け、肩の血を一瞬凝視して、それから今は気にしないというような表情で、

「だからセイバーのサーヴァントです。なので私のことはセイバーと」

少女は再び自分はセイバーだと名乗る。その真っ直ぐに見つめてきた瞳に俺も、

「…俺は…相川始だ…」

反射的に答えてしまった。似ているのか？あいつに…

「アイカワハジメ…では、あなたのことはハジメと…」

セイバーは一人納得してうなづく。

しかし、俺の疑問はほとんど解消されない。

「おい、俺が知りたいのはそんなことじゃ…」

と言いかけたところで、

「警戒せずとも大丈夫です。契約した以上、私は貴方の僕です。貴方を裏切ることはありません」

そのセイバーはきっぱりと言い切つた。

とりあえず、さつきは助けてくれたから敵ではないのか…

そう思い、俺は彼女への警戒を緩めた。

「敵でないことは分かつた。だが説明しろ、俺はマスターだのサー・ヴァントだののことは全く分からない」

俺に顔を見て少しばかり事情を悟ったのか、彼女は圧迫感を弱めて答えた。

「分かっています。貴方は正規のマスターでは無いのでしょうか。ですが今は先に敵を迎撃しなければ」

敵、という言葉を聞き俺の神経が再び強張る。確かに堀の外に気配を感じる。

堀の外に二つ…

バツ！

有無を言わせず、彼女は外に駆け出した。

「おい！待て！」

俺も追いかける。

すでに戦いは始まっていた。外には先ほどの赤い男と少女がいて、驚いたような顔をした。セイバーは、その勢いのまま赤い男に切りかかる。男も反応して双剣を出現させ受け止めようとするが、見えない刃は双剣をたやすく碎き男を切り付ける。

「消えなさい！アーチャー！」

男の後方にいる少女がそう叫ぶと、赤い男はセイバーをすり抜けるように消えた。しかしながらセイバーは止まらない。

「なめるな！」

赤い少女は飛びざりながら、宝石を投げる。投げられた宝石は光りを放ちスパークする。しかし、セイバーには全く効果が無いよう得意にも介さず近づき、腕を振り上げる。

「ウソ…」

振り下ろされた武器を少女は横倒れして何とか躱す。そして尻餅をつき、その鼻先にセイバーの武器が突き付けられた。

「今のは見事だつた魔術師（メイガス）。だが最期だ、アーチャーのマスター」

そう言い放ち武器を振り上げる。

「おい、やめろ！」

その言葉は自然に出てきた。

どんな人間でも死なせたくない。俺はもう、直感的にそう思えるようになつていた。

「ですがマスター。敵のマスターは排除しておかなくては」

セイバーは苛立ちの混ざった視線を向けてくる。

「俺は、お前たちの事情など知らん。だが人間が殺されていい理由などそうないだろ？…それにその娘にはさつき助けてもらつた。そんな人間をそう簡単に死なせてたまるか」

人間として一つの命でも失いたくないと思う。あいつが教えてくれたその気持ちはすでに俺の中で確かなものになっていた。

「あなたのマスターはああ言つてゐるけど、この剣は下げるくれないのかしら」

少女はどこか落ち着きを孕んだ声で聞いた。

「クッ…分かりました」

そんな俺の意思を感じ取つてくれたのか、セイバーはしぶしぶ引いた。

「大丈夫か？」

俺は倒れた少女に歩み寄る。

「え、ええ、何とか…」

立ち上がろうとした少女の視線が俺の方の傷の方に向くのが分かつた。

「この血のことは今は気にしないでくれ、話すと長くなる」

そう弁解しながら、刺されていない右腕を彼女に差し出した。

「そ、そうなの…」

少女は戸惑いながらも俺の手をつかみ立ち上がる。そして一歩下がつて言つた。

「とにかく自己紹介からかしら。私は遠坂凜、魔術師よ。名前は好きに呼んでいいわ」

魔術師だと？まあ、吸血鬼の化け物や妖怪がいるんだ魔法ぐらいあつてもおかしくないが…ん？この子見たことがある気がする…ああ、そうか時々ハカラシダに来る娘だ。

「なあ、君、ハカラシダという店に来たことはないか？」

「ハカラシダってあの喫茶店の…あ！あの店の従業員！」

なんだ、俺の事覚えてるのか。俺は印象に残りにくいタイプだと思うのだが。

俺のそんな疑問をよそに

「ともかくあなた名前は？」

と遠坂凜は続けた。

相手が名乗つてくれたんだ。こちらも名乗つて問題ないだろう。

「…俺は相川始だ。後ろのこいつは白井虎太郎」

危険が去つたと分かり、虎太郎も屏の外に出ていた。

「そう、相川始ね。いろいろ聞きたいことはあるけど、まずは礼を言うわ。助けてくれてありがとう」

遠坂は落ち着いた声で言つた。

「礼を言われるようなことはしていない。それに君には借りがある」「……」

彼女は少し考えるようなしぐさをしてから口を開いた。

「ねえ、こっちの事情を知らないって言つてたけど、まさかあなた、魔術師じゃないの？」

魔術師、よくおとぎ話に出てくるあれか？じやあ、さつきの宝石は魔法なのか？

「えつ!!君、魔術師なの!!じやあ、さつきのあれが魔法なの!!やつぱり呪文とか唱えたりするかな?」

俺のすぐ後ろまで近づいていた虎太郎が未知への好奇心を押さえられず口をはさんできた。

「……」

当の彼女は、少し引いているようだ。

「ね?ね?どうな「お前は黙つてろ」…ハイ…」

切りがないのでとりあえず黙らせる。

俺の方は、自分自身それこそ冗談みたいな存在なので、そんな突拍子もないものも冷静に受け入れることができた。

「君の言う魔術師というものがどういうものを指すのかは知らんが、俺はそんなものではない」

言つた瞬間遠坂の顔から余裕というものが一気に消える。

「ほ、ホントなの!!まさか聖杯戦争自体を知らないとか言わないわよね…」

聖杯、引っかかる言葉だがそんなものは知らんな。

「いや、やはり分からない」

「で、でも礼呪があるつてことはサー・ヴァントと契約したってことよね、魔術師でないのにそんなこと…」

呆然とした顔で彼女はそう言うと、俺の横で何も言わず佇んでいたセイバーに視線を向けた。そしてその視線の意図に気づきセイバーも口を開く。

「はい、私は確かにハジメをマスターとして召喚されています。それはそうとハジメ、肩の傷は大丈夫なのですか？」

心から心配しているようなそんな聲音だつた。

「こんな傷、数時間あれば治る」

引き寄せる夜の風は冷たかつたが気にはならない。血が足りないのは少し問題だが…

「え、大丈夫なの？」

遠坂はさらに困惑した表情を浮かべる。

「俺の傷は気にするな。俺は今何より状況が知りたい」

…召喚…契約…マスターとは主の事か？

今まで出てきた単語と、人間をより知るために今までに多少読んだフィクション小説で得た単語を照らし合わせ俺はその結論に至つた。「ねえ、あなた、せめてある程度特殊な人間ではあるのよね。その血といい、その落ち着きようといい…」

遠坂は、もはやすがるような声で聞いてきた。

俺も一瞬戸惑つたが、血を見られてしまつたからにはある程度説明は必要だと思い、認めることにした。

「ああ、特殊ではあるな…」

人間ではないが…：

「そう、なら、まだ対応の余地はあるわね…」

そう言つて遠坂は、やつと元の余裕のある顔に戻つた。

「ねえ、一度私の家に来ない？」

少し間をあけて彼女は言つた。

「何故だ？」

「いろいろ事情を話すにしても外じゃあれでしょ。それにその傷もなんとかしなきゃだし」

なるほど、悪い話ではないな。しかし…

「それはいいが少し待つてくれ。さつき一人仲間を呼んだ。先に合流したい」

そう言うと彼女は警戒するに目を細め、

「那人、あなたの特殊な事情の関係者?」

と聞いてきた。

「ああ、そうだ」

そう答えると彼女はまた少し考え…

「どうして? 家で合流すればいいじゃない」

「それは俺が君やそこにある彼女をまだ完全に信用しきっていないからだ」

横にいるセイバーに目線を向けつつ、俺は正直に答えた。

二人とも少し目を鋭くした。

「信用できないのは分かるけどすぐに屋敷に向かつた方が安全じやない?」

こう遠坂が答えると、

「信用していただけていないのは心外ですが待つてくださいマスター。魔術師の工房はその者の城、敵の胎の中に入つていくようなものです。危険すぎます」

と反論したのはセイバーだった。

そういうものなのか? 魔術師について何も知らないので何とも言えん。

「はあ、ま、一般の魔術師にとつてそういう場所であることは否定しないけど、少なくとも今敵対するつもりはないわ」

遠坂は筋の通つた受け答えをしてくる。

まあ、こちらから似ても敵対する意思は感じられんが不確定要素が多くすぎるな…

「そうか…分かつた。仲間はもう少しでここへ来る。そいつと合流してから君の家へ向かう」

総合的に考えてやはりそれが一番妥当だと思った。

「ハジメ、やはり魔術師の工房へ向かうのは危険です。話し合いをするにしても、別の場所で試みるべきかと」

セイバーは重ねて反対してくる。

「俺の仲間は武器を持つてきている。それを早く受け取りたい。それがあれば行動の自由度は上がるからな」

武器という表現を聞いたことで遠坂の顔が一層強張る。

「それどういうもの？ それも特殊な事情に関係あるの？」

「ああ、落ち着けば逐一話していい、だが今は待て…」

虎太郎のせいでのライダーのことは世間に知れわたっている。隠す意味がない。

「ま、分かったわ。言つとくけどサーヴァントというものは拳銃程度で倒せる相手ではないわよ？ それでも合流が先？」

「その男が持ってくるのは強力な武器だ。だが無論君が敵意を持たない限り使う気はない」

遠坂は動じない俺を見てついに折れた。

「その武器の事を含めて教えてくれるの？」

俺は静かにうなずいた。

「なら、少し待ちましょう」

彼女もうなずき返す。

「で、お前はどうする？」

また俺はセイバーを見やる。

「武器を確保するのは賛成です。ですから拒否はしません」と淡々と言つたので、話はまとまつたようだ。

### 第3話 二つの戦い

私、遠坂凜はイライラしていた。

車両らしきライトの光が見える。

白井と名乗った男が追加の連絡を電話でした後、真夜中の寒空の下、數十分待つてやつと謎の男、相川始が仲間だとする男はやつてきた。

赤い、派手というか奇妙なバイクに乗つたその男は屋敷の前で停まる、かぶっていたヘルメットは外し、

「無事か始!!」

と相川に駆け寄つた。

近くに街灯一つがあるので暗くて顔はよく見えないが、アラサーといった年齢の男性に見えた。

「ああ、傷自体に問題はない。まずそれよりも…」

冷静に男の問い合わせた相川は、その先に何かを要求しているようだつた。そしてそれを男はすぐに理解できたようで、懐から掌サイズのケースのようなものを取り出し、相川に手渡そうとした。

「待つて。それが、『武器』なの?」

だとしたら、よく観察しておかなければいけない。  
だが、

「ああ、そうだ。これが『武器』だ。だが話すと長い、後でいいか?」  
あつさりと相手は明かしてくれた。まあ、さつき私を助けた時点で相手は相当情報を欲しているのは確か見たいだし、話してもらえるかは分からぬが襲われる事はないだろう。さつきだつて拷問でもするならいくらでも出いそうな状況だつたのだから。私はそう結論を出し、うなずいた。

「始、彼女が?」

そう後から来た男が言つた。相川はそうだと短く答えた。  
それを聞き男は私の方に向き直つた。

「橘朔也だ」

そう言つて握手を求めてきた。知的な感じのする声だつた。

「遠坂凜よ」

名乗り返し握手した。

それから彼らを屋敷まで案内した。道中警戒心を向けられてこそいたが特に何もなかつた。

「へー、大きい屋敷だね」

屋敷の前に来ると白井という男がのんきそうに言つた。

この男を警戒する必要は無さそうね。

私もつられてそんなことを思つてしまつた。

4人を応接室に迎え、その部屋のソファーアーに座らせる。

(アーチャー、動ける?)

私は外で待機しているであろう彼に念話した。

(外装は修復した。戦闘は無理だがそれ以外に支障はない)  
との返答だつたので

(紅茶を5杯入れて持つてきてくれない?)

と指示を出した。

(問題はないがいいのか? そんなのんきなことをして)

彼からは渋るようなことを言われた。

(いつも冷静に優雅たれ、それが遠坂家の家訓なの。なのに客をもてなさないわけにはいかないじやない)

それが危険な相手であればこそ毅然と対応するべきなのだ。  
(はあ、君は相変わらず…)

(ん、何よ…)

アーチャーは何か言いよどんだ。

(いや、なんでもない。まあ任せておいてくれ)

(そ、お願ひね)

その後に意識を目の前に戻した。座っている4人にはまだ緊張の色が見える。さつき頼んだ紅茶はこのためだ。

「待つてて、今アーチャーに温かい飲み物入れさせてるから」  
「アーチャー…さつきの赤いやつか…?」

相川は抜け目なく聞いてきた。

「そうよ。彼の入れる紅茶結構おいしいのよ」

場を和ませるよううにそう言つてみる。

「大丈夫なのか？」

「ん？ アーチャーの事？ それなら戦闘は当分無理だけど回復可能だし、そのくらいの動作に支障はないわ」

そう言いつつセイバーを見やる。彼女は少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。

私の方も余裕ぶつてはいるけど、サーヴァント相手では無防備も当然、なんとか敵対せずに協力を引き出したいけど、厄介そうね。

そして数分がたちアーチャーのお茶で少し和んだところで本題に入る。

「それで、そちらから説明してもらえるかしら？」

そう言つて相川に視線を送つた。

「いいだろう。虎太郎あれば持つてるか？」

「うん。身分証明に便利だからね」

白井は持つっていたバックから1冊の本を取り出すと、目の前のテーブルに置いた。

本の題名は『仮面ライダーの仮面』白井虎太郎著…え？

仮面ライダー、一時期世間で話題になつていたあの？ 協会でも3年前の不明生物大量発生事件と合わせて大騒ぎになつていていたけど…

私は驚いて白井を見る。

「そう、僕はこの本の著者で、この2人は仮面ライダーサ」

あまりに突飛な話に説明するはずのこつちがついていけない。

「あの、ハジメ。仮面ライダーとは何ですか？」

口を開いたのはマスターのことを誰より知つておきたいはずのセイバーだった。

「アンデッドという怪物と戦う戦士の事だ」

相川は簡潔に答えた。

「アンデッド？」

死徒がつくるあの？

「うーん、話すと長くなるんだ。この本に全部書いてあるんだけど…」

白井は戸惑うように言う。

書いてあるのか…だが本人たちの口から聞くに越したことはないだろう

「いいわ。約束通り逐一話して」

この際とことん知つておかなければ。

「うん。じゃあ遠坂さんはさ、人類がどうして地球を支配するに至つたか考えたことある?」

それから、白井によつてアンデツドとライダー、そしてバトルファイトについてのことが語られた。驚くことに、それは聖杯戦争と共通する点がいくつもあつた。

「そして、カリスとブレイドの連携でジョーカーアンデツドをなんとか倒して、バトルファイトは終結した。それでダークローチ達も消えたつてわけなんだ」

「それが、仮面ライダー…」

一通り話を聞き、私は呟くように言つた。

途中見せられた『ラウズカード』の帯びる神秘から考えて話にはある程度の信憑性があるとみていいだろう。3年前までの怪人騒ぎは事実であるし。

まるで一つの英雄譚を聞いているようだつた。特に剣崎一真、彼は英雄の座に迎えられていてもおかしくないとと思うほどだつた。もつともすべてが真実とは限らないし、美化されている可能性も大いにあるが…

「バトルファイトとライダーについては分かつたわ。次はその体について教えてもらえないかしら?」

一同の表情が一気に強張るのが分かつた。

「始、どうする?」

白井は、深刻な顔をして相川に聞く。

よほど深刻な話なのだろう。さて相手はどう出るか…

「血を見られた以上話すしかないだろう。変に詮索されても困るしな

⋮

相川は平然と答えた。

「なら俺が説明しよう。そこは俺の専門だしな…」

口を開いたのは橘だった。

白井の話では、ダイヤストートのライダー、仮面ライダーギヤレンに変身する男。

「そう、ならお願ひ」

コクツと橘はうなずいた。しかし…

「ちよつ、橘さん!!」こういうのは…」

何故か白井が慌てだした。

「確かに虎太郎の言う通りかもしれん…橘、ここは…」

相川も何か察したようだ。

「…うつ、お前たちの言うことも分かるがここは俺に任せてくれ…」

橘はさつきこの話が専門だ、などと言っていた。なら確かにこの男が適任ではないだろうか。それなのに2人は乗り気ではないようだ。何故かしら…?」

結局一人が黙つたので橘が話すこととなつた。

「最初に言つておく、これから話すことは本にも載つていない。絶対に口外しないでくれ、絶対にだ。もし誰かに漏らそらものならそれ相応の報いを受けてもらうことになる」

いきなり高圧的な前置きをされたので一瞬驚く。

「話の内容にもよるけど、分かつたわ…」

橘は静かにうなずく。セイバーもさうに瞳を鋭くしてマスターの話に耳を傾けているようだ。

「こいつの体は結論から言つてしまえば、アンデッドに近いものになつて いるんだ。アンデッドと同じあの緑の血がその証拠だ」

「アンデッドに近い…?」

いきなりインパクトのある結論だ。一体どういうことだ?

「こいつの体は、アンデッドに近い不死性を持つて いる。さすがに中枢器官をつぶされれば死ぬが、ある程度の外傷はすぐに治る」

それでさつきの傷がすぐにふさがつたわけだ。サーヴァント並みの生命力を持つということか…いや、重要なのはそこじゃないわね。そのことを橘に聞こうとした時、

『どうしてそうなつたのか』か?』

とまるで用意していたように先に言つた。私は無言でうなずく。

「それはな、始のカリスバツクルに原因がある。カリスバツクルは俺たちが使つているものと違つて、試作品でシステム 자체を体に埋め込むものなんだ。システムのもとになつたジョーカーの能力を再現するためにな」

体に埋め込むなんて!! そんな危なげなシステムだつたの? ライダーシステムつて…

そんな私の驚きをよそに橘の話は進んでいく。

「それもあつて始は例外的に『カテゴリーA』以外のアンデッドとも融合できる。しかし、そのせいでアンデッドとより深く一体化してしまつてな、始はアンデッドに近い体になつてしまつたんだ」

そんな複雑な人物にあの子は懐いていたの…? っていうかあの子は知つているのかしら?

私は気になつて聞き返した。

「どのくらいの人がそのこと知つてるの?」

「BOARDの人間と白井のみだ。白井の近親者含め、だれも知らない。だから口外するな。生きた実験材料として始を狙つてくる奴らが出てくるかも知れないからな。そうでなくとも始の私生活に支障が出る恐れもある」

なるほどね。あの子は知らないか…  
ならなぜ私に話したのだろう。

疑問が解決してまた一つ生まれた。

「じゃあなんで私に…」

「さつき始が言つた通り、詮索されでは面倒だからな。言つてはいけない理由を話した方が早い。それに一人の個人が流す情報ぐらいならBOARDでもみ消すこともでき無くはない。変に勘織られる方が迷惑というわけだ」

何故だろう何か引っかかる。だが一通り知りたいことは知れたので今はいいだろう

「これで納得したか?」

橘は少し疲れたように聞いてきた。

「ええ、今聞いたことは誰にも話さないわ」

私は少し微笑んで答える。

相手がどんなことを隠しているにしろ、それで自分まで注目されはそれどころではない。

「そうだ、この本上げるから、何かわからなければここから探すといいよ。半分は暴露本みたいなものだからね」

差し出された本を受け取る。

後でよく読み込む必要があるわね。

「…それで、話すべきことは話した。次は君の番だ。今何が起こっているか話してくれ」

相川が強い眼光を向けてきた。

一般人と聞いてどう説明しようかと思つたが意外に簡単に済みそうだ。

私は意を決して口を開いた。

「分かつたわ。でも私の方の話も下手に話さないで、あまり噂を広めると私達魔術組織が動いてあなた達はただでは済まなくなるわ」

「なるほど、お互いまになるな。それでいい」

相川は表情を変えずに言つた。

私もうなずき、話し始める。

「まず、いま私たちこの街にいる魔術師は『聖杯戦争』という儀式をしているわ」

「聖杯…戦争…聖杯…」

そう言いつつ相川は何か思い当たることがあるような顔をする。相川の反応は少し気になるがそれは後でいいと思い、私は話を続けた。

「そう、聖杯戦争。簡単に言えばあなたたちが言つてたバトルファイトのようなものよ」

「バトルファイトと同じだと？」

相川たちは眉を顰める。

「ええ、私もあなたたちの話を聞いて驚いたわ。そつくりだつてね。

聖杯戦争とは7人の魔術師が万能の願望機、聖杯をかけて戦う儀式

よ

「そ、それって万能の願望機ってどんなでも願いを叶えられるものつてこと?」

白井が目を輝かせて聞き返してくる。

「そう、それを手に入れるために聖杯に選ばれた7人の魔術師がマスターとなり7つのクラスそれぞれのサーヴァントと契約し、それらを使役して殺しあうもの」

「サーヴァント…」

相川は、真剣な雰囲気を際立たせる。

「詳しい話は割愛させてもらうけど、サーヴァントっていうのは、あらゆる人の世の時代の英靈を聖杯が呼び出し、受肉させたもの。人の域を超えて精霊に近い存在となつた英雄を兵器として行使するもの。まあ、あなたたちの言うところのアンデッドってところね」

相川はセイバーに視線を向ける。

「そう、あなたはさつき彼女、剣士のクラス、セイバーのサーヴァントを呼び出し契約した。本来魔術師じやない人間がそんなことになるなんてありえないのだけれど、普通の体じやないのなら説明もつくかもしれない…」

「確かにハジメからの魔力供給は通常の魔術師の水準です。生物が本来帶びている魔力の絶対量そのものが多いようです」

セイバーが静かに言う。

どんな生物でも少なからず魔力を帶びている、それが魔術師の水準ということはそれだけ生物として強力つてことなのか…思つたより規格外なのね…

私はまだいまいち得体のしれない相川を分析しながら話を進めた。「とにかく一番重要なのはあなたももう、この聖杯戦争におけるマスターになつて戦うしかなくなつたつてことね」

「戦うしかない?」

相川は少し厳しい顔をして睨んできた。

「そう、聖杯から選ばれたマスターは戦いから降りることは許されず、たとえあなたに戦う意志がなかつたとしても他のマスターはあなた

「殺しに来るわ」

「バトルファイトのような戦いに参加者として巻き込まれたというとか？まだ話の全体像が見えん。儀式だと願望機だと、もう少しがみ碎いて話してくれ」

相川の表情に苛立ちが見える

それが当然の反応だろう。

「まあ、確かに分かりにくいわよね。だから、ふさわしい人に話してもらいましよう。隣町の教会にこの戦いの監督役がいるわ。そいつからなら詳しい話が聞けるけど行く？」

正直というかホントにあの男には会いたくないがこの際はしようがない。

「今からか？」

相川はあまり乗り気ではないようだ。

「ええ、聖杯戦争の舞台は夜。急ぐに越したことはないわ」

またさつきのランサーなんかが襲つてくるかもしれない。この男には一刻も早く、状況を分からせることが必要だ。

「私もそれを推奨します。私の目的は聖杯です。ハジメにはどうしても戦いに参加してもらいたい」

セイバーも賛同する。それを聞き相川は煮え切らないような目線をセイバーに向けた。

セイバーは聖杯が目的？サーヴァントつてだいたい聖杯に興味なって話だつたけど、彼女は違うのだろうか。

相川は、少し考えた後

「分かった行こう

と言つて立ち上がつた。

「始？」

白井が急な行動に驚いたのか声を上げる。

「俺がおかれている状況がただごとでないことは確かにようだ。それに願いを叶える願望機…少し、興味がある…詳しく聞きたい」

なるほど聖杯に興味はあるのね。

「それなら、俺も行こう。君もそこの彼女も話が分かる人間のようだ

が、詳細が分からぬ以上、始を一人で行動させるのは危険すぎる。

それでいいな」

そういったのは橘だつた。

「いいけど、協会内は関係者以外立ち入り禁止だから外で待つことになるわよ」

さすがに特殊な人物とはいえマスターでもない人間を入れて説明を受けるなんて無理だろう。

「それぐらいならいい。しかし、白井も一人にしたくない。ついてきてもらううぞ」

「わ、分かった」

そうね、さつきの様子を見てランサーに顔を覚えられている彼を一人にさせるのは危険か。

そうして私たちは本日二度目となる移動を決めた。

※

俺たちは屋敷を出て、協会に向かい歩き始めた。

もう、傷もだいぶ癒えていて、傷はふさがつっていた。

「……」

気づづくと、セイバーが含みを持った視線を向けていることに気づいた。  
彼女は今、武装解除を嫌い、遠坂から借りたコートでからうじて鎧を隠している。

「何だ？」

俺は感情を込めずに聞く。

「いえ、その、私としてはこれからのことを考えるとせめてマスターには警戒心を解いてほしいと思いまして」

彼女は少し気まずそうに答えた。

前を歩く遠坂が、こちらの反応をうかがうように視線を向けてくるのが分かつた。

「それはこれから聞く話しだいだ」

俺は短く答える。

俺も丸くなつたとはいえ、この状況で彼女を無条件信用できるほど

にはなつていいない。

ふと、あいつならすぐに打ち解けるだろうか？なんてことも考えてしまった。

そして、一時間もしないうちに教会の前についた。

「橘、虎太郎を頼む」

入れるのはマスターのみということで、外で待機することになる二人に声をかけた。

「ああ、白井は任せろ」

「始、気を付けてよ」

2人は心配しつつ答えた。

「ああ、分かつてる」

そして、俺は遠坂と門をくぐった。

「聞きそびれていたが、その監督役とやらはどんな人間なんだ？」

そう俺が聞くと、彼女は明らかにうんざりした顔をした。何故だ？  
「名前は言峰綺礼、私の後見人で私の父の弟子で、兄弟子、腐れ縁つてやつよ」

彼女は協会の戸を開け、中の照明を付けつつ言つた。  
できれば出会いたくなかつたけど、とつけたして。

そして、声がかかつた。

「同感だ。師を敬わない弟子など欲しくなかつた」

前を向くと比較的長身の男が立っていた。これまでであつたこの  
ないような雰囲気をしていた。

「再三の呼び出しにも応じぬと思えば、変わった客を連れてきたな。  
彼が7人目か？」

男はどこまでも無機質な声を出した。

「そ、でも魔術師ですらないみたいだけど、一般人つてわけでもないみ  
たいだわ。あなたには聖杯戦争について彼に説明してほしいの」  
遠坂もそれに単調に答える。

「ほう、では君は何者なんだ？君の名前は何だ？」

言峰は自分に視線を向ける。 ▪

その目は心底得体のしれないもので、その声は警戒感を俺に生ませ

た。

「俺は、相川始。仮面ライダーだ」

言峰は、心底驚いた顔をして、

「仮面ライダー、3年前の事件に関わったと言われる、あの？」

と言った。

何だ、知っているのか、遠坂が端に興味を持たなかつただけか：俺は領き、事前に言われた通り『カテゴリーA』を相手に見せた。「なるほど、私もあるの本は読ませてもらつた。して、それがラウズカード。確かに並々ならぬ神秘を感じる。本物のようだ、了解した」

「何？あなた、仮面ライダーを知つてたの？」

言峰が微笑みながら、うなずいていると今度は遠坂が口を出してきた。

「何を言う凜、怪人騒ぎは現実に起きていた。魔術師として、それくらいの情報には目を通しておくものだぞ」

「……」

そのあと、言峰は俺の方に向き直り、

「分かつた、バトルファイトのことを考えると、君がこのことに関わるのは偶然ではないかもしれないな。よからう、君に教えよう、聖杯戦争とは何なのかを」

それから俺は聖杯戦争について詳しく聞いた。サーヴァントの事、マスターの事、聖杯の事、令呪の事、そして戦いを降りることもできるということ。

願いをかけて戦う、か…小規模なバトルファイトというたとえが的確だな。

俺は聞いた情報を頭の中で整理した後、一つ出てきた疑問を問う。「お前の言つたことがすべて真実だつたとしよう。だがなにカリスクはないのか？奇跡には代償がつきものというものだろう」

そう、例えば俺のような…

「ほう、戦いの中で死ぬことがそのリスクでは不足か？」

言峰はさつきの不気味な笑みを浮かべ聞き返す。

「そんなに都合のいいものがあるとは思えないだけだ。無償で奇跡を

おこなえるのは胡散臭い

参加するのなら、確認しておいて損はない。

「…まあ、君の言つたリスクにあてはまるかは分からんが、あるとすれば個人の願いを叶える、ということだろう。聖杯は願いの善悪に関係なく願いを叶える。その願いが邪悪だつた場合は災厄がもたらされることもあるだろう…その例が14年前、この冬木で起こつたの大火災だ」

言峰は淡々と言つた。

「な、に…？あれが？」

俺も動搖を隠せなかつた。

「ああ、あれは前回の聖杯戦争の勝利者が何を願つたかは分からんが、聖杯の奇跡によつてもたらされた災害なのだ」

だとしたら、あいつは一部の人間の欲望によつて家族を失つたのか。そう理解した瞬間、胸の中に焼けるような怒りが生まれた。あいつはこんな事のために…全てを…

「目つきが変わつたな。決心がついたのか？」

出す答えは一つ、その奇跡とやらであいつが救えるかは分からないが、そうでなくともこの戦いが災厄を起こすというのなら、それを防ぐ義務がある。

それはあいつが最初に願つたことなのだから、

あいつの代わりに俺が人間の世界にいるのだから…

だから俺は…

「ああ、俺はマスターとして戦う」

戦わなければいけない、仮面ライダーとして。

「よろしい、君をセイバーのマスターとして認めよう。これでこの聖杯戦争は受理された。諸君、己の誇りに従い、存分に競い合え」

そのあと、俺と遠坂は外に出て、少し移動してから他のみんなに聞いたことと、戦うと決めたことを伝えた。

「話は分かつた、なら俺はどうすればいい？あいつのためだ、俺は協力を惜しまないぞ」

橘は俺の願いを察し、聞いてくる。

「そのことだが、お前たちは東京に帰つていってくれ。この戦いはサー  
ヴァントとマスターとのツーマンセルが基本らしい。下手に危険な  
目に合わせるより、お前たちが後ろに控えていてくれた方がこつちも  
気が楽だ」

「そうか、分かった。だがいつでも動けるよう睦月にも連絡を入れて  
おく」

まだ少し、心配そうにしているが俺の案を受け入れてくれた。

「じゃ、じゃあ、僕は君がホテルにいるより動きやくなるように拠点を  
手配するよ。姉さんたちにも話を付けておく」  
と言つてきたのは虎太郎だつた。

「ああ、そうしてくると助かる」

何日も帰らないのは、二人とも心配してしまうだろう。俺の中ではそ  
れはとても重要なことだった。

天音ちゃんは電話してくるだろうな…

「マスター、よろしいですか」

「う」

唐突にセイバーが近づいてきて、声をかけてきたが、完全に意識外  
だつた。

「い、いかん…一人のことを考えているといろいろ緩んでしまう。  
「そ、そのなんだ？」

俺の変な土曜にセイバーは首をかしげる。

「いえ、私とともにに戦いに参加していくだけるということでいいのか  
と確認したいと思って」

「ああ、そういうことだ。それなりに宛てにさせてもらうぞ」

そう、俺が言うと途端にセイバーの表情は明るくなつた。

「はい、よろしくお願ひします」

意外に、人懐っこいのか…

「話、まとまつたかしら？」

話がひと段落したところで遠坂も話しかけてきた。

「これから、私たちは敵同士になるわ。今日はともかく明日からは容  
赦しない、つてことでいいわね」

その言葉がどういう意味を持つのか、すぐに分かった。

「そうだな、だが君には本当に世話になつた、ありがとう。できれば君とは戦いたくないな」

「そう、ね。でもお互貸し借り無しつてことにしといて、明日からはしつかり敵同士にならないと」

この少女はなんだかんだ言つて優しい人間であると理解できた。

「……！」

不意に叩きつけられる強烈な圧力――

「お兄さんたち、お話を終わつた？」

向き直ると白髪の少女と、これまで感じたことのないレベルの殺気を放つ大男がいた。

数時間前

私は買い出しを終え、家路についていた。あたりはすでに暗くなつてゐる。

私はそこで見たことのない男性とすれ違つた。

その時、耳もとで、

――うまく、引き寄せてくださいね――

私はその言葉の意味が理解できなかつた。

## 第4話 聖杯、再び

現れたのは白い髪の少女と黒々とした肌の大男。私は、とつさにマスターの前に出る。

「皆様、ご機嫌麗しゆう、私はイリヤスフィール・フォン・aignツベルン」

少女はスカートの裾を上げ優雅にお辞儀した。

「aign…ツベルン…」

後ろの凛が焦ったような声を上げる。

「おい、まさか…」

ハジメは信じられないというような顔をしている。

「そうです、彼女もマスターです。おそらくサーヴァントは狂戦士、バーサーカーかと…」

危険です。マスターは下がつていてください

「そんな…あんな子供が…」

「マスター以外にも混ざってるみたいだけど、いいわ、全部殺して、バーサーカー」

こちらの気分など歯にもかけず、少女はバーサーカーに命令した。緊張が一瞬で高まり、頂点に達する。

バーサーカーの世界さえを揺るがすような咆哮が響く。

「■■■■■■■■■■■■■■■■！」

「来ます！」

バーサーカーはアスファルトを抉つて跳躍した。

私は迎撃の準備をした。幸いにもマスターは至極冷静だつた。一番対応が遅れるであろう白井を横抱き、後ろに跳躍した。バーサーカーは私の数歩先に着地する。それだけですさまじい衝撃が発生する。

私は意を決し、王風<sup>インビンシブル</sup>・<sup>エア</sup>結界に包まれた剣を構え、突撃する。

剣と斧がぶつかり合い、甲高い金属音とともに火花が散る。その一瞬で理解した。

—強い—

それも、とてつもなく。百凡の英靈になら絶対に負けないという自信はある。だが目の前のそれはそんな領域にいるものでもなかつた。間髪入れずあらゆる方向から斬撃が殺到する。それは例外なく迅く、鋭く、まとまりのあるものだつた。バーサーカーとは思えない技量の高さ、おそらくは魂に染み付いたものであるのだろう、いつたいどんな武勇を誇る英靈なのか…

マスターから引き離すように撃ち合う。

—ズキッ！

胸に走る鋭い痛み、ゲイ・ボルクのダメージだ。一瞬動きが鈍る。狂戦士はその隙を逃さなかつた。

ほとんど大岩のような斧が、私の腰に衝突する。存在ごと抉り取るような一撃、意識を保つだけで精一杯。私は空高く投げ出される。

体が地面に叩きつけられる。

意識はほとんどなかつた。

立ち上がれたのはそれこそ本能のようなものだつた。  
「そいつ再生するから首をはねて」

イリヤスファイールは冷酷に告げる。

バーサーカーは相変わらず、射殺すような殺氣をぶつけてくる。もはや、痛みとすら言えないような痛みが意識を削る。黒い影が私にとどめを刺さんと跳躍の予備動作に入る。

だが引くわけにはいかない私の後ろには守るべきものがある…

—シユタツ！

えあたしと狂戦士の間に影が割つて入つた。私は声を失う。

バーサーカーも同じく驚愕したイリヤスファイールに合わせて動きを止める。

「マスター…！」

それはハジメだつた。

「あなた、何考へてるの？」

目の前のマスターの愚行にイリヤスファイールは軽蔑するような瞳

を向ける。

「誰かに守つてもらうのは性に合わない」

自分はマスターの前に立ちたかつたが、朦朧とする意識からそうはできなかつた。ただかすれた視界の中、懷から一枚のカードを出すのが見えた。

「ちよ、ちよつと！あなた下がりなさい！」

「始！」

後方の凜や橘たちも叫ぶ。

「そ、いいわ。無駄だと分かつたから死にたいつてことね。やつちやえ、バーサーカー！」

バーサーカーは今度こそ跳躍する。

しかし、その時にはマスターの腰にそれが巻かれていた。

「変身」

マスターが放つたその言葉、魔術の詠唱には短すぎるそれがどんな意味を持つのか、その時の私は理解できなかつた。

—C H A N G E —

無機質な声が聞こえたかと思うと、突如マスターの体に流水のようなものが流れれる。

「マスター！」

バーサーカーの凶刃が迫る。私は言葉に出すだけで限界だつた。  
——ガキンツ——

一際強い金属音、飛び散る火花、バーサーカーの斧は弾かれていた。目の前に現れた、黒い鎧をまとう戦士によつて…

「……っ！」

バーサーカーは敵のあまりの変化を警戒し、後ろに飛びずさつた。

黒い戦士はその手に持つた弓のような得物で斧を弾いたのだ。

「マス、タ——なのですか？」

そう問うと彼は肩越しにこちらを見やりうなずいた。その視線は彼のかぶつた仮面越しにも分かる鋭さを帶びていた。

それは奇妙な仮面だつた。2本のしなつた突起をたたえ、ハート型の複眼を持っていた。普段は柔らかいイメージを持たせるそれだが

そこからは抜け目のない鋭さが感じられた。

そして、それはただ美しかつた。

「あなた、何者?」

イリヤスファイールの問いかけに、黒い騎士は向き直る。

「そうだな……この際だ、カリス、仮面ライダーカリスと名乗つておこう」

マスターがどんな表情をしているかは分からぬが少女の顔が一気に険しくなる。

カリス、それがマスターのもう一つの名。この戦いでその名を名乗る意味とは…

「あなた、そんな名前ふざけてるの!?!」

少女は凍てつくような視線と声音で言つた。

「悪いが、この名前とはもう何年も前からの付き合いだ」

マスターは動じず、腰のバッグルを手に持つた武器をおもむろに付けつつ言つた。

「そう、あなたが何者にしろ、聖杯の名を騙るような傲慢な行為を後悔させてあげる!バーサーカー!」

カリス、それはまさに聖杯の意。

「俺にも負けられない理由がある。戦うしかないというなら、そうするまでだ。相手が誰であろうともな…」

ハジメの、いやカリスの落ち着いた言葉を啖呵に戦いは再開された。

両者が動いたのはほぼ同時だつた。

バーサーカーはまとも距離を詰めんと踏み出す。マスターは右手で私を横抱きそのスマートな体躯からは想像もできない脚力でふわりと後方へ飛び上がつた。カリスはそのまま、持つてゐる弓から光弾を放つた。それはバーサーカーの頭部に命中したが、まるで効いていないようだつた。

「…………」

カリスは柔らかに着地し、私を立たせるや否や、

「遠坂……ここは俺たちが食い止める。そのかわり虎太郎を安全圏まで

逃がしてくれ……

と後ろにいる凛に言つた。

凛は一瞬戸惑いながらも了解し、白井を連れ走り出した。

それに反応したバーサーカーは逃がさないと言わんばかりに、標的を凛に変え急接近してくる。

そこに立ちふさがつたのは、橘だつた。

「俺を忘れるな！変身！」

—TURN UP—

その電子音とともに橘の前に光の壁が現れた。男はそれをくぐり赤い仮面の騎士となる。

私にはもう驚く氣力すらなかつた。赤い騎士、ギャレンはバーサーカーの斧を紙一重で躰し、スライディングしながら至近距離で銃弾を放つた。その弾丸はバーサーカーの目元にあたつた。それを受けバーサーカーは初めて怯んだ。それに乗じギャレンは距離を開けた。マスターもすでに次の手を打つていた。彼は一枚のカードを取り出し、弓に読み込ませる。

—RECOVER—

その音声とともに紋章が浮かび上がりカリスの右腕にしみ込み光りを帯びる、そしてその手を私の傷口に叩きつけた。

「…つり」

私は激しい痛みを覚悟したが、苦痛はなかつた。それどころか痛みは引き、体力も回復した。

「マスター…」

私が言い切る前にカリスは弓を構えながら、「動けるなら來い、そうでないのなら引け」と短く言つた。

返答など決まつてゐる、身体も戦闘可能だ、それに本来マスターを守るべきサーヴァントが、守られるなどあつてはならない。「はい、行けます」

私は複眼を真つ直ぐ見て言つた。

それを聞くとカリスは無言でバーサーカーへ駆け出した。私もそ

れに続く。

ガリツ！ ジヤリツ！ ダンツ！

それからの戦いは拮抗したものだつた。カリスがバーサーカーの攻撃を逸らし、一定の距離を保つギャレンの射撃が行動を阻害し、私が切り込む。

一様攻撃は通つているようだが、決め手になるものはなくすぐに回復していた。

「おい、セイバー。一瞬でいい、こいつの動きをとめるような攻撃、あるか？」

カリスは巧みに攻撃をいなしながら聞いてきた。

「はい、ですが若干のためが必要で…」

このままではらちが明かないと考え、作戦を思案する。

「その隙は俺が囮になつてつくろう」

そう言つたのはギャレンだつた。

「頼んだぞ橘。セイバー、お前は俺たちが次のカードをラウズしたら距離を取つてその攻撃の準備に入り、俺の合図で繰り出せ」

私は無言でうなずく。

そして2人は素早くカードを取り出し、武器に読み込ませた。

—FUSION—

私とカリスは飛びずさつた。入れ割るようにギャレンが2枚のカードをラウズし、バーサーカーへ突撃する。

—THE END—

2つの紋章がギャレンのアーマーに溶け込む。  
「風よ喰れ…」

私の声に反応し、剣を竜巻が包む。そしてそのエネルギーは収束していく、際限なく高まつていく。解放の準備は整つた。

それを悟つたバーサーカーは目の前で妨害を続けるギャレンにとどめを刺さんと、斧を大きく振りかぶり、振るう。その無慈悲な斬撃がギャレンに届くかと思われたその時、ギャレンの体が煙のように消えた。

バー サー カー は あ る べ き 手 ご た え の 喪 失 に よ つ て バ ラ ン ス を 崩 し た。

「 や れ ! 」

カリス が 叫 ぶ。

相 手 は ア イ ン ツ ベ ル ン 、 私 の 真 名 な ど ど う に 知 つ て い る 、 よ つ て 剣 を 隠 す 理 由 は な い 。 こ こ し か な い と 確 信 す る 。

「 王 風 鉄 鎧 ! ストライク・エア 」

解 放 の 言 葉 と とも に 剣 を 突 き 出 す 。

超 高 密 度 の 龍 卷 の 塊 が バ ー サ ー カ ー の 体 に も ろ に 直 撃 し た । そ の 巨 体 は 浮 き 上 が り 倒 れ 完 全 に 無 防 備 な も の に な つ た 。

— B I O —

す か さ ず カ 里 斯 は カ ー ド を ラ ウ ズ し 、 弓 の 先 端 を 地 面 に 突 き 立 て る 。

す と ど バ ー サ ー カ ー の 近 く の ア ス フ ア ル ト か ら 太 い 無 数 の ツ タ が 伸 び た । そ れ は 容 救 な く バ ー サ ー カ ー を 拘 束 し た 。

そ れ だ け で は す ぐ 破 ら れ る と 思 つ た । し か し 、

— R O C K —

空 中 に 突 如 現 れ た 黄 金 の 翼 を も つ ギ ャ レ ン が カ ー ド を 読 み 込 ま せ 、 弹 丸 を 放 つ 。

弾 丸 は ツ タ を 石 に 変 え て い た 。

そ う し て そ の 隙 は 決 定 的 な も の と な つ た 。

「 決 め る ぞ 、 橘 ! 」

「 分 か つ て る ! 」

2 人 は 3 枚 の ラ ウ ズ カ ー ド を そ れ ぞ れ 取 り 出 し 、 読 み 込 ま せ た 。

— F L O T —

— D O R I L —

— T O R N A D O —

3 つ の 紋 章 が カ 里 斯 に 溶 け 込 み 、 額 が 光 る 。

— G E M I N I — •

— D R O P —

— F I R E —

ギヤレンにも同様の事が起きる。

—SPINNING DANCE—  
—BURNING DIVID—

そして二人は飛び上がった。

先を飛ぶギヤレンが2人に分身し、その間にカリスが入る。カリスは回転とともに竜巻を帯びる。ギヤレンの足もまた炎を帯び始める。そして2人はバーサーカーに足を向け急降下する。その力は一つとなり、大きな炎の渦のようになる。

「ハアアアアーーー！」

2人の蹴りは間違いなくバーサーカーの胸に刺さつていた。轟音が響き、熱波が広がる。

「…くつ！」

これが、仮面ライダーの力。

迫りくる熱波と防風、それが止んだ時、2人は私の傍らに立ち爆炎を見つめる。

しかし、黒い影は健在だつた。

「そんな、手ごたえはあつたはずだ…」

ギヤレンは驚愕の声を上げる。

バーサーカーはなおもこちらを攻撃せんとし、歩みだす。私たちも身構えるが、後ろから、

「もういいわ、バーサーカー」

少し離れたところから戦いを見ていたイリヤスファイールが近づいてきてバーサーカーを制した。

「あなたたち、バーサーカーとここまでやりあうなんてやるじやない。でも残念だつたね、バーサーカーは不死身なの」

彼女はクスクスと笑いながら言葉を続ける。

「…つー…どういう意味だ！」

カリスが若干の動搖を見せ、彼女を問いただす。

「どうしてつて、バーサーカーは一番強いサーヴァントだからよ。ギリシャ神話一の大英雄、ヘラクレス」

「…つー…」

なるほど…武勇も知名度も私すら凌駕する英雄、白兵戦で彼に勝てる者はいないと言つていいだろう。

「でも今日は見逃してあげるわ。まだまだ楽しめそうだから」

少女はニコニコしながらバーサーカーに歩み寄つた。

「帰るわよ、バーサーカー」

バーサーカーは命令に従い、彼女抱きかかえた。

私はカリスを一瞥したが彼は小さくうなずき、一步下がつた。相手が引いてくれるなら追わないということだろう。

私は警戒こそ解かないが剣を下した。

白い少女はそれを見ると無邪気な笑みを浮かべ、

「またね、おにいさん♪」

それは少女の見た目に違わぬ愛らしい声だった。

バーサーカーは跳躍し、視界から消えた。

冬木の冷たい空気が戦闘で高ぶつた精神を徐々に収めていった。